

小学校の英語教育を考える

—— 東京都内公立小学校のケース・スタディを通して ——

前 田 里 紗

1. はじめに

日本の首都である東京を歩くと、多くの外国人に遭遇する。また、東京のみならず京都や日光など日本の和の文化を象徴する観光地には、特に日本人より外国人が多いようにも思える。そして2020年の東京オリンピック・パラリンピックや2025年の国際博覧会の効果により、さらに多くの外国人が来日することが予想される。日本政府観光局の調査(2018、2019a)によると、訪日外客の総数は、2017年は28,691,073人、2018年は31,191,856人となっており8.7%の伸率を記録している。この結果は、東京オリンピック・パラリンピックや国際博覧会の効果も加味すると、今後さらに増えることを予想させる。また、同局の調査(2019b)によると、2018年の世界各国・地域への外国人訪問者数ランキングでは1位がフランスの約86,918,000人、2位がスペインの約82,773,000人、3位がアメリカの約76,941,000人となっており、日本は全世界の11位、アジアで4位となっている。この日本の結果は、2017年の全世界の12位、アジアで4位という結果と比べると順位を上げているという。国土交通省観光庁の調査(2019)によると、2018年の訪日外客の目的は7割以上が観光・レジャーとなっており、ついで業務となっている。こうした情報から、日常的に身の回りに外国人が増え、コミュニケーションをとる機会が増えることが予想される。

一方、文部科学省(2009)は、グローバル化について、以下のように述べている。

「グローバル化」とは、情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物材、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになるとともに、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象ととらえることができる(文部

科学省、2009、文部科学省ホームページ引用)。

先に述べた日本にいる多くの外国人の例もこれにあたる。そして、教育にも様々な影響が出てきている。その1つに同省(2013a)が発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」があり、その中に小学校3学年から英語教育が導入されるという旨が示されている。これに関して、2013年に全9回にわたり行われた英語教育の在り方に関する有識者会議(文部科学省、2013b)においては様々な意見が挙げられている。例えば、第1回においては、小学校教員にとってALTとの打ち合わせの時間を取るのにはなかなか難しい、第6回においては、CAN-DOリストで小学生に「～することができる」という外から見える評価だけでなく定性的な評価もするべきだ、第9回においては、特に5学年から英語が教科として必修化されることを受け教員養成や免許制度の見直しが必要がある、という意見が公表されており、英語教育の早期化に関して課題は山積み状態であることが分かる。

こうした状況を踏まえ、実際に、小学校の英語教育がどのような状態なのか、児童および教員は英語教育についてどのように考え、また、実際にどのような英語学習が学校でおこなわれているのかを知りたいと考えた。そこで、東京都の公立小学校の協力を得て、英語の授業見学や児童と教員へのアンケートから、小学校の英語教育に関して考察を述べ、現状や今後の在り方について検討する。

2. 東京都の小学校における英語教育の現状

2013年12月に文部科学省が発表したグローバル化に対応した英語教育改革実施計画においては、東京オリンピック・パラリンピックを見据えたうえでの英語教育を行うとしている。同じく東京都教育委員会は2020年とその先を見据えたうえで、2018年2月に2020年度へのグローバル人材育成の目標の設定とその目標達成への手段を明示した東京都グローバル人材育成計画'20(Tokyo Global STAGE'20)を取りまとめた(東京都教育委員会、2018a)。ここにおいて、①授業の質を高めると②学ぶ時間・機会を増やす、③学ぶ意欲を高め、学び続けるという東京都教育ビジョンに示される3つの柱を踏まえて、20の施策が示されている。

項目1つ目には、小学校英語の教科化等への対応が示されている。2020年度より小学校高学年の教科としての英語教育が実施されることを受け、様々な東京都の取り組みが示されている。例えば、現状として、2018年度から2年間移行措置を取るという国の動きに加え、東京都は2016年度から「英語教育推進地域」を2年間指定し、また、

小学校英語教科化に向けた教員の指導力向上のために「英語教育推進リーダー」を配置している。

2年間の移行措置に積極的な対応を取ることで、小学校英語の教科化に対するメリットとデメリットを早い段階で見出すことができる。現に移行措置が取られない大学入学共通テストの英語民間試験活用に関しては2019年11月1日に、多くの批判や経済面や移住地域格差に関する問題から文部科学大臣より延期が提言され、新学習指導要領が適用される2024年度から実施するとした（文部科学省、2019）。教科化まで半年を切った今、今回の研究から現場の声を直接聞き、小学校英語について考えていきたい。

3. 先行研究

3.1. 小学校の英語教育に関する課題

鳥飼（2018）は、最大の問題点に、「誰が教えるのか」という点を挙げている。専門家ではない小学校の教員にとって、短い期間の研修は十分ではなく、また、中学校の英語科の教員免許保持者が小学生への教え手となることもされてはいるが、そもそも中学生と小学生の認知的な発達が異なるため、苦勞が多いという。さらには特別免許を発行して一般人が教えることも行われているが、見極めや質の確保についての懸念もあるようだ。

木原（2018）は、成績がつくという点に問題があるとしている。どのように評価するかが明確になっていない中、1つの学級に、正確な英語を使うがおとなしい児童と文法的に間違っている英語を使うが積極的に取り組む児童がいた場合の評価の方法はどうするのかという問題や、良い点数を取ることを目的とした教育が「勉強したのに話せない」という結果を生んでしまうという問題があるようだ。

小学校へ教科としての英語を導入するという新しい試みに対し、実際に関わる児童や教員間で様々な意見がうまれることは当たり前のことである。しかし、やってみないと分からないというのは正しい考え方であるように感じる。アンケート調査から、現場からの意見をまとめ、考察をしていく。

3.2. 児童と英語教育

本研究では児童の英語の授業に関する考え方をアンケート調査の項目に入れている。松宮（2010）は、首都圏、北陸地方および中国地方の公立小学校全9校に所属する小学校5、6学年1,497名に英語活動に関する質問紙調査を行い、児童の「不安」を中心に考察した。強い不安を多くの児童が感じている状況ではない、という結果が出た。男子

より女子の方が、5 学年より 6 学年の方が、より強く不安を感じる傾向にあり、また、学校外学習をしていない児童の方が不安を感じる傾向にあるという。

日本の小学生の英語学習への動機付けに関する研究がおこなわれている。Carreira (2011) は、小学生の英語学習と学習全般への動機付けの関係を、東京郊外の公立小学校 1 校の 3 学年から 6 学年 268 名を対象に調査したところ、英語学習への動機付けと学習全般への動機付けのどちらも学年が上がるにつれて低下していることが分かった。

不安や動機付けだけでなく、実際に英語力に関わる研究も行われている。バトラー他 (2006) は、学年や活動時間数、活動形態が児童のリスニング力にどのような差を生むかについて、全国で児童英検を受験した 5,087 名を対象に調査を行った。児童英検は現在英検 Jr. と名前を変えている（公益財団法人日本英語検定協会ホームページ参照）。その結果、より長く英語活動を行ったり文字や書き言葉を導入したりしているクラスに在籍する児童の方が、リスニング問題の正答率が高いということが分かった。

実際に児童時期の英語学習が、大学生になった後にどのような影響を及ぼしているのだろうか。樋口他 (2008) は、関西の国立大学・私立大学文系の 1、2 年生 937 名を対象に、中学校入学以前の塾等における英語経験者と英語未経験者を比べ、中学校入学以前の英語学習経験が英語学習への情意面にどのような影響を与えているかを調査した。その結果、「英語活動や英語学習は楽しい」という設問の「英語学習に対する関心、意欲、態度」や、「知らない語や表現があっても全体の流れから意味を理解しようとしている」という設問の「英語の学習方略」において、中学校入学以前の英語学習経験者は未経験者に比べて高い得点であったという。

本研究のアンケート調査では、児童が現在英語の授業を楽しく感じているかとその理由、どのような授業を望んでいるかについての項目を設けている。教科としての英語が必修化されてから、その効果を問うために実際の英語力に関わる調査が行われていくことになることが考えられるが、リスニング力に関わる調査は大変興味深い。というのも、2017 年 7 月に告示された小学校学習指導要領の外国語活動・外国語編において、英語では、聞くこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕の 3 つの領域別に目標が設定されている（文部科学省、2017a）。この中の〔やり取り〕〔発表〕という表現はこの改訂から導入されたことばで、中学校や高等学校での学習指導要領においても同様の表現が使われるようになった（文部科学省 2017b、文部科学省 2018a）。話すことを 2 つの領域に分けたことを受け、より話すことという技能が重要視されていることが分かる。特に〔やり取り〕にはリスニング能力が必要とされるため、早期からの英語学習が

結果につながる事が考えられる。授業見学を通して、どのように授業で「やり取り」や「発表」がおこなわれているのかにも注目していく。

3.3. 小学校教員と英語教育

様々な小学校の教員を対象にした英語に関する調査が行われている。以下調査日の古い順から紹介していく。

北條他（2008）は、公立小学校教員が求める小学校英語活動に関する支援や校種間連携、研修希望内容、クラスルーム・イングリッシュをはじめとする知りたい英語表現について、千葉県の現職小学校教員 133 名を対象に調査したところ、必要な支援として、ALT（Assistant Language Teacher：外国人語学指導助手 JACET 教育問題研究会、2017 参照）への対応や小学校英語活動に関する研修が挙げられた。また、必要な連携として、地方教育委員会の強力なバックアップが最も多く挙げられ、次に中学校・高等学校の連携が挙げられた。研修の希望内容として、歌・チャンツ・ゲームの活動内容に関する回答やクラスルーム・イングリッシュなど英語力に関する回答が多かった。知りたい英語表現として、「順番に答えてください」や「励ましやほめることば」などが挙げられた。

猪井（2009）は、2009 年度より導入された茨城大学が主催する教員免許講習会にて「小学校英語」講座の内容を決めるにあたり、事前アンケート調査を茨城県内の小学校教員 41 名を対象に実施した。39 名に海外渡航経験があり、そのうち半数以上の 20 名が 1～10 日間の海外滞在による海外渡航経験であると回答をした。また、授業形態に関しては、英語の授業を担当しているという回答者のうち 9 割以上がティーム・ティーチング（英語科におけるティーム・ティーチングとは、日本人教員と ALT の協同形態の言語活動を主体とする授業を指している JACET 教育問題研究会、2017 参照）形式で指導していると答えた。そして、半数近くが英語活動の授業に負担を感じており、9 割以上が授業に必要な英会話とクラスルーム・イングリッシュに関する研修を望む回答をした。

松宮（2013）は英語活動を「担当している」「担当した経験がある」「担当する予定がある」教員 198 名を対象に、指導不安にかかわる問題意識を調査した。その結果、①聞く話すスキル不安因子、②読み書きスキル不安因子、③授業指導不安因子、④異文化不安因子、⑤英語指導力不安因子、⑥授業設計不安因子、⑦英語ネガティブ経験因子、といった 7 つの不安因子を抱えており、特に ⑤英語指導力不安因子 が他因子との因果関係が強かったとした。

2020 年度より、小学校 3、4 学年は英語活動、5、6 学年は教科としての英語が必修となることを受け、及川（2017）は 45 名の小学校教員を対象に、小学校教員が感じる不安について調査をした。研究課題は、教員年数や英語指導年数、中学校英語教員免許の有無にフォーカスを当てている。その結果、英語力に関わる項目の不安度はどの年代でも高いことや、中学校英語教員免許を取得している教員の英語指導の不安度は取得していない教員と比べると低いということなどが分かった。

これらの調査における大きな違いは、英語活動の必修化における調査であるか、教科としての英語の必修化における調査であるかという点である。本調査は、その後者にあたる。調査校においては、実際に教科として英語を先行実施しているため、今後の小学校における英語教育について考える大きなヒントを得ることが期待される。教員が前向きな気持ちで指導することで、児童にとってもより良い学習となるため、教え手である教員の考えを綿密に考察していきたい。

3.4. ケース・スタディについて

今回は 1 校のみで研究を行うため、対象を特定したケース・スタディとなる。実際に先行研究では、どのようにケース・スタディという形で研究を行っているかについて調べた。池田（2009）は、近畿地方の公立小学校における英語活動の授業分析やインタビューを通して、ALT とのティーム・ティーチングの成功を支える要因について研究した。分析にあたっては、参加者の経歴や人数といった詳細や研究対象の小学校において英語活動がどのように行われてきたかや、調査期間などが示された。研究の結果、①足場かけに伴う時間的・精神的余裕の醸成 と ②指導案に関する日本人教員と ALT の意思統一、③日本人教員と ALT の文化相互理解 の 3 つが ALT とのティーム・ティーチングの成功を支える要因として挙げられた。

ケース・スタディにあたって、池田（2009）の研究と同様に児童と教員の人数の詳細に加えて、使用教科書や学校の詳細についても示していく。

4. 研究課題

本研究では、2 回の授業見学と、児童と教員を対象とした英語の授業に関するアンケート調査を行い、小学校英語の現状を明らかにすることによって、今後あるべき小学校の英語教育を考察するために、以下の 4 つを研究課題として取り上げることとする。

- (1) 小学校児童は英語と学校内外においてどのように関わっているのか

- (2) 小学校児童はどのような英語の授業を望んでいるのか
- (3) 小学校教員は英語の授業に関してどのように考えているのか
- (4) 小学校教員は今後の英語教育をどのように考えているのか

5. 研究方法

5.1. 研究協力校

東京都 23 区内にある公立小学校で、1 学年から 6 学年まで計 546 名の児童が在籍している（2019 年 6 月 1 日時点）。以下 A 小学校とする。1956 年 4 月開校で、2016 年には創立 60 周年となった。2018 年 3 月には東京都より、「子供の体力向上推進優秀校」に指定された。近隣の幼稚園や保育園、小学校、中学校、高等学校、大学などと連携・交流して様々な活動を行っており、東京女子大学もその 1 つにあたる。A 小学校を選んだ理由としては ①東京女子大学と関わりがあるためと ②地域との連携・交流があるため、③英語の特別指導指定校ではないため、という 3 つが挙げられる。5 学年、6 学年は『We Can!』（文部科学省）と『Welcome to TOKYO』（東京都教育委員会）の 2 冊の教科書を用いている。A 小学校では、担任と補助教員の 2 名がチーム・ティーチング形式で英語の指導にあたっている。補助教員は区教育委員会が斡旋しており、授業においては主的指導者を担っている。

5.2. 研究対象

授業見学においては、5 学年の 1 学級（男子 18 名、女子：13 名）を見学した（以下 B 組とする）。アンケート調査においては、A 小学校の 5 学年 88 名（男子：51 名、女子：37 名）、6 学年 89 名（男子：47 名、女子：42 名）の計 177 名と教員 25 名（男性：11 名、女性 14 名）を対象に行った。

5.3. 調査方法

5.3.1. 授業見学

2019 年 4 月より、A 小学校 5 学年 B 組の英語の授業を見学した。5 学年を選択した理由としては、教科として英語を行っている学年であることに加え、お願いをした先生の担当学年であることが挙げられる。2020 年度からの教科化にあたり英語の授業を週に 1 回先行実施している。授業は基本的に担任と補助教員のチーム・ティーチング形式で、電子黒板を用いながら行われている。観察にあたり、「活動内容」と「児童が

どのように授業に参加していたか」を項目として、まとめていく。また、2019年8月5日には、東京女子大学の有志学生がA小学校において、English Day Camp と題し英語の授業を行った。児童の参加者は希望者の12名（男子：6名、女子：6名）であった。English Day Camp においても、授業見学同様の項目内容をまとめていく。

5.3.2. 英語の授業に関するアンケート調査

A小学校の5学年88名（男子：51名、女子：37名）、6学年89名（男子：47名、女子：42名）の計177名の児童を対象に英語の授業や英語に対する考え方に関するアンケート調査を行った。「英語の授業は楽しいか」や「その理由」、「英語を使ってどのようなことができるようになりたいか」などの項目から、英語との学校内外での関わりや望む授業内容について考察していく。また、A小学校の全教員25名（男性：11名、女性14名）を対象にアンケート調査を行った。項目においては性別や年齢、英語民間試験の受験経験などの自身の情報に加えて、「英語の授業担当は負担に感じるか」や「望む研修内容」などといったものを設け、英語の授業への姿勢や要望について考察していく。実際のアンケート調査を行う前に、同じゼミ生5名を対象にパイロット・スタディとしてアンケート調査を行った。以下はその際に出た指摘点と改善案である。

- (1) 教員のアンケート調査の海外渡航をしたことがあると答えた上で主な行先と期間を尋ねる項目に関して、複数ある場合が考えられるため、「直近の」と指定したり複数回答える欄を設けたりした方が好ましいと思う。

⇒「主な」と指定したことにより、複数ある場合も考えられるため、行先と期間に目的を加えて、3回分の記入欄を設ける。

- (2) どちらを対象にしたアンケート調査もその他の欄の（ ）をもう少し広くした方が好ましいと思う。

⇒より詳細な回答を促すために、広くする。

- (3) 教員のアンケート調査の自由記入欄をもう少し広くした方が好ましいと思う。

⇒小学校の英語教育についての考えをより詳しく回答させるために、広くする。

- (4) 外国語と英語が入り乱れているため、どちらかに統一した方が好ましいと思う。

⇒英語に統一する。

以上の検証を踏まえて、アンケート調査の最終案を完成させた。児童の言語能力（日本語）についての配慮が必要なことから、最終案を作成した後、A小学校の管理職、および担当の先生に項目（内容）と指示言語についてアドバイスを頂いた。

5.4. 考察方法

英語の授業に関するアンケート調査については、回答者全員分の回答を集計し、考察を行う。回答結果の集計および図や表の作成には Microsoft Excel 2019 を用いた。その他の回答や自由記述は、児童や教員が書いたものをそのまま載せた。また、児童のアンケートにおいて、「英語の授業」というタイトルで作画を求めた。その画像を挿入し、紹介する。

6. 研究結果

6.1. 授業見学のまとめ

2019 年 4 月より、5 学年 B 組の英語の授業を見学した。

6.1.1. 授業見学の詳細

日時：2019 年 4 月 23 日（火）、5 月 14 日（火）の 4 時間目（11 時 35 分～12 時 20 分）

場所：A 小学校 5 学年 B 組の教室

対象：5 学年 B 組の児童 31 名（男子：18 名、女子：13 名）

担当教員：担任と補助教員の 2 名

トピック：“I like～.”

使用教科書：『We Can!』（文部科学省）の 5、6 ページ

流れ：添付資料 A、B の通りである

6.1.2. English Day Camp の詳細

日時：2019 年 8 月 5 日（月）10 時～12 時 30 分

場所：A 小学校の多目的室と 3 教室

English Day Camp と題して、東京女子大学の有志の学生が 4、5、6 学年の参加希望者 12 名（男子 6 名、女子 6 名）を対象に英語の体験教室を行った。プログラムは添付資料 C の内容で行われた。

6.2. アンケート調査結果

6.2.1. 児童アンケート調査

6.2.1.1. 調査人数

表 1 調査対象児童の詳細

	男子	女子	計（学年）
5 学年	51	37	88
6 学年	47	42	89
計	98	79	177

各学年の人数は表 1 の通りである。英語の授業は楽しいか、楽しくするためにやりたい活動は何かなどについて質問した。アンケートは添付資料 D に示す。

6.2.1.2. 英語の授業の楽しさ

表 2 英語の授業は楽しいか

	①	②	③	④	⑤	⑥
5 学年	20	29	16	13	6	4
6 学年	7	30	16	23	11	2
男子	17	34	16	17	11	3
女子	10	25	16	19	6	3
合計	27	59	32	36	17	6

①とても楽しい ②楽しい ③まあまあ楽しい ④普通
⑤あまり楽しくない ⑥全然楽しくない

どちらの学年も ②楽しい の回答者が最も多い。5 学年の回答者数は ②楽しい に次いで、①とても楽しい、③まあまあ楽しい の順で多かった一方で、6 学年は ②楽しい に次いで、④普通、③まあまあ楽しい の順となっている。男女どちらも最も多いのは ②楽しい となっているが、次いで男子は ①とても楽しい、④普通 の項目が同数で多い一方、女子は ④普通 が多いという結果になっている。

6.2.1.3. 児童にとって楽しい活動

表3 【(1) で①から③と回答した児童を対象】 どんなことが一番楽しかったか

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
5 学年	16	17	11	2	5	6	4	4
6 学年	18	10	7	0	6	5	1	6
男子	22	16	7	1	6	5	3	6
女子	12	11	11	1	5	6	2	4
合計	34	27	18	2	11	11	5	10

①歌 ②発音やリズムの練習 ③歌に合わせたダンス ④ 読解問題
⑤リスニング問題 ⑥ライティング問題 ⑦スピーキング問題 ⑧その他

英語の授業の楽しさを尋ねる (1) の問いにおいて、①とても楽しい と ②楽しい、③まあまあ楽しい と回答した児童を対象に楽しかった活動について尋ねた。5 学年の回答者数は ②発音やリズムの練習をすること、①歌を歌うこと、③歌に合わせたダンスをすること の順で多かった。6 学年の回答者数は ①歌を歌うこと、②発音やリズムの練習をすること、③歌に合わせたダンスをすること の順で多かった。男女の回答の差はほとんどなく、どちらも ①歌を歌うこと と ②発音やリズムの練習をすること、③歌に合わせたダンスをすること に回答が集中した。⑧その他の回答は、ゲーム (5 学年男子 1 名、6 学年男子 2 名、6 学年女子 2 名)、新しい単語を覚えること (5 学年男子 1 名)、数字リレー (6 学年女子 1 名)、相手と英語で会話すること (6 学年男子 1 名)、他の人と英語で会話すること (5 学年男子 1 名、6 学年女子 1 名) といったものだった。

6.2.1.4. 英語の授業を楽しいと思った理由

表4 【(1) で①から③と回答した児童を対象】 どうして楽しかったのか

	①	②	③	④
5 学年	6	16	35	7
6 学年	7	10	28	8
男子	5	17	37	7
女子	8	9	26	8
合計	13	26	63	15

①簡単だから ②外国に興味があるから
③もっと英語を使えるようになったから ④その他

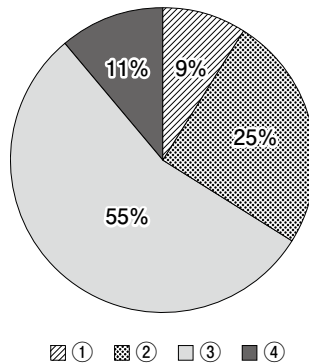


図1 どうして楽しいと思ったのか（全体）

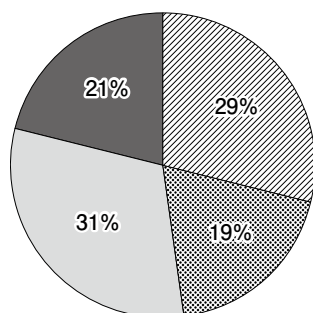
(2) 同様、(1)において①とても楽しい、②楽しい、③まあまあ楽しいと回答した児童を対象に英語の授業を楽しいと思った理由を尋ねた（5学年男子1名が無回答）。どちらの学年においても、③もっと英語を使えるようになりたいからという回答者が最も多かった。男女とも③もっと英語を使えるようになりたいからという項目への回答が最多であった。男子は次いで②外国に興味があるから、④その他の回答が多かったが、女子は③もっと英語を使えるようになりたいから以外の①簡単だからと②外国に興味があるから、④その他の3つの項目の回答数にほぼ差がなかった。その他の回答は、大人になって外国の人と話してみたいから（5学年男子1名）、気分が良くなるから（5学年男子1名）、色々なことがあるから（5学年男子1名）、英語を習っているから（5学年女子1名）、ダンスや歌が好きだから（5学年女子1名）、歌を作るときに使いたいから（5学年女子1名）、ウキウキするから（5学年女子1名）、アメリカに行きたいから（6学年男子1名）、洋楽をよく聴くから（6学年男子1名）、英語が好きだから（6学年男子1名）、外国の言葉が話せるから（6学年男子1名）、英語を読めるようになりたいから（6学年女子1名）、もともと外国の歌が好きだから（6学年女子1名）、面白いから（6学年女子1名）、普通に（6学年女子1名）といったものだった。

6.2.1.5. 英語の授業をつまらないと思った理由

表5【(1)で④から⑥と回答した児童を対象】 どうしてつまらないと思ったのか

	①	②	③	④
5 学年	7	6	3	7
6 学年	10	5	15	5
男子	8	7	9	7
女子	9	4	9	5
合計	17	11	18	12

①難しいから ②簡単すぎるから ③興味がないから
④その他



▨ ① ▩ ② □ ③ ■ ④

図2 どうしてつまらないと思ったのか（全体）

英語の授業の楽しさを尋ねる（1）において、④普通と⑤あまり楽しくない、⑥全然楽しくないと回答した児童を対象に英語の授業をつまらないと思った理由を尋ねた（6学年女子1名が無回答）。5学年は①難しいからと④その他が同数で最多の回答者数であった。6学年は③興味がないからと答えた回答者が最も多かった。全体の割合としては、①難しいからと③興味がないからの2つが多かった。男女ともに①難しいからと③興味がないからの回答数に大きな差はない。回答数が最も多かった項目と回答数が最も少なかった項目の差を比べると、男子は2（③興味がないからと②簡単すぎるから・④その他）であるが、女子は5（①難しいから・③興味がないからと②簡単すぎるから）となっており、女子の回答にばらつきがあることが分かる。その他の

回答としては、特に特徴がないから（5 学年男子 1 名）、ずっと同じことをやるから（5 学年男子 1 名）、英語を知っても何も得しないから（5 学年男子 1 名）、あんまり楽しくないいつも似た授業だから（5 学年男子 1 名）、緊張しているから（5 学年女子 1 名）、ダンスをするのが恥ずかしいから（5 学年女子 1 名）、覚えられないから（5 学年女子 1 名）、読めなくてつまらないから（6 学年男子 1 名）、真面目すぎるから（特に日本人の時）（6 学年男子 1 名）、そんなに楽しくないから（6 学年女子 1 名）、どう言えばいいのかわからない（発音とか）から（6 学年女子 1 名）、英語ができないから（6 学年女子 1 名）といったものだった。

6.2.1.6. 英語の授業で望む活動

表 6 授業をより楽しくするためにどんなことをしたいか（複数回答可）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
5 学年	25	31	15	21	32	18	20	31	6
6 学年	23	24	7	14	19	11	12	24	6
男子	27	33	10	15	29	19	18	23	7
女子	21	22	12	20	22	10	14	32	5
合計	48	55	22	35	51	29	32	55	12

①歌 ②発音やリズムの練習 ③歌に合わせたダンス ④問題を解く
⑤英語で会話 ⑥リスニング ⑦リーディング ⑧ライティング ⑨その他

全回答者を対象に、授業でどのような活動をしたかについて尋ねた（複数回答可）。5 学年は僅差ではあるが、⑤もっと英語で会話をしたい の回答者数が最多であり、6 学年は②もっと発音やリズムの練習をしたい と⑧英語で何かを書きたい の回答者数が最多であった。また、それぞれの学年で好まれる活動が分かれていることが分かる。男子の回答数は、②もっと発音やリズムの練習をしたい が最も多く、次いで⑤もっと英語で会話をしたい、①もっと歌を歌いたい の順番となっている。一方女子の回答数は、⑧英語で何かを書きたい が最も多く、次いで②もっと発音やリズムの練習をしたい と⑤もっと英語で会話をしたい が同数で多いことが分かる。その他の回答としては、もっと難しい問題を出してほしい（5 学年男子 2 名）、英語を使ったゲームがしたい（5 学年男子 1 名、6 学年女子 1 名）、みんなが恥ずかしくないような授業を受けたい（5 学年女子 1 名）、ちょっとした詩を作りたい（5 学年女子 1 名）、英語の遊びがしたい（5 学年女子 1 名）、英語で食べ物の名前を言えるようにしたい（6 学年男子 1 名）、三単現

など活用できることを詳しくやりたい（6 学年男子 1 名）、単語を教えてほしい（6 学年男子 1 名）、簡単な本を読みたい（6 学年男子 1 名）、隣の人とだけでなくもっと他の人ともできる活動をしたい（6 学年女子 1 名）といったものだった。

6.2.1.7. 英語を使ってできるようになりたいこと

表 7 英語を使ってできるようになりたいこと（複数回答可）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
5 学年	32	34	69	26	28	54	8
6 学年	27	29	54	32	34	42	4
男子	28	37	62	29	22	54	9
女子	31	26	61	29	40	42	3
合計	59	63	123	58	62	96	12

①本や新聞を読む ②映画やドラマを見る ③外国の人と話す
④歌を歌う ⑤手紙や文章を書く ⑥外国に行く ⑦その他

全回答者を対象に、英語を使ってできるようになりたいことについて尋ねた（複数回答可）。どちらの学年も ③英語で外国の人と話せるようになりたい と回答した者が最も多く、次に ⑥外国に行ってみたの項目の回答者数が多かった。男女ともに最も回答数が多かったのは ③英語で外国の人と話せるようになりたい、次に ⑥外国に行ってみたの回答数が多かったが、男子は 3 番目に ②英語の映画やドラマを見られるようになりたいの回答数が多い一方、女子は ⑤英語で手紙や長い文章を書けるようになりたいの回答数が 3 番目に多かった。女子は回答数の多さの 2 番目と 3 番目の数にあまり差はない。その他の回答としては、将来のために覚えたい（5 学年 1 名）、服やお店の看板に書いてある英語を読めるようになりたい（5 学年男子 1 名）、外国に住みたい（5 学年男子 1 名）、サッカー選手になっていろいろな国に行きたい（5 学年男子 1 名）、英語の歌を聴いて何と言っているか知りたい（5 学年男子 1 名、5 学年女子 1 名）、弟に英語を教えてあげたい（5 学年女子 1 名）、英語の歌を作りたい（5 学年女子 1 名）、留学したい（6 学年男子 1 名、6 学年女子 2 名）、英語でゲームを作りたい（6 学年男子 1 名）があった。

6.2.1.8. 英語の学校外学習について

表 8 学校外学習をしているか

	はい	いいえ
5 学年	33	55
6 学年	31	58
男子	35	63
女子	29	50
合計	64	113

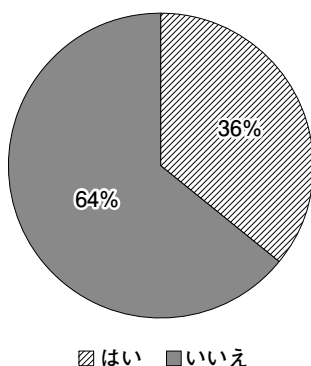


図 3 学校外学習をしているか (全体)

全回答者を対象に、英語の学校外学習の有無について尋ねた。どちらの学年も大きな人数差はなく、全体では 36% が学校外学習をしていると回答した。男子全体の人数から比較すると男子は 35%、女子全体の人数から比較すると女子は 36% とほぼ差がない。

表 9 どこで学校外学習をしているか

	①	②	③	④	⑤
5 学年	21	8	1	3	0
6 学年	23	2	2	3	1
男子	24	6	2	2	1
女子	20	4	1	4	0
合計	44	10	3	6	1

①塾や英会話教室、家庭教師 ②通信教材 ③ラジオ ④家族 ⑤その他

また、学校外学習をしていると回答した児童を対象に、どこで学校外学習をしているかについて尋ねたところ、半数以上が①塾や英会話教室、家庭教師と回答した。次いで多かったのが②通信教材で、「スマイルゼミ」や「チャレンジイングリッシュ」といったものだった。③ラジオと回答した児童全員が「ラジオ英会話」を聴きながらテキストを使って勉強していると答えた。男女ともに最も多いのは、①塾や英会話教室、家庭教師という項目だった。男子は次いで②通信教材が多く、女子は②通信教材と④家族が同数で次いで多かった。その他の回答としては、公民館での公開講座を利用している（6学年男子1名）というものだった。

6.2.1.9. 英語の授業へのイメージ

「英語の授業」というタイトルで絵を描くよう求めた。



画像1 授業時の児童と教員の様子（5学年男子）

児童が描いた「英語の授業」には、実際にどのような授業がおこなわれているのか、児童がどのように授業に取り組み、何を感じているかを知ることができた。英語の授業では、教員が黒板を使い言葉を教えること（画像1）がおこなわれていることが分かる。

6.2.2. 教員アンケート調査

6.2.2.1. 調査人数

調査人数の詳細については、20代男性が4名、女性が1名、30代男性が4名、女性が7名、40代男性が2名、女性が3名、50代男性が1名、女性が3名である。性別や年齢、担当学年、海外渡航経験とともに英語の授業に対する考えをたずねた。アンケートは添付資料Eに示す。

6.2.2.2. 小学校全科以外に取得している免許

小学校全科以外に免許を取得しているか、取得している場合はその詳細について尋ねたところ、25 名中 18 名が小学校全科以外の免許を取得していると回答した。実に全体の人数の 7 割以上となる。

小学校全科以外に取得している免許の詳細は、社会科が 5 名と最も多く、幼稚園教諭が 4 名、英語科が 3 名、国語科と保健体育科が各 2 名、数学科、理科、家庭科、美術科が各 1 名である。取得していると回答した 18 名のうち、2 名が「社会科と家庭科」「国語科と英語科」といった複数回答をしたため、合計が 20 となっている。⑤社会科、①幼稚園教諭、④英語科 の順番で回答数が多かった。

6.2.2.3. 海外渡航経験とその詳細

海外渡航経験の有無とその回数、目的、行先、期間について尋ねたところ、25 名中 21 名が海外渡航経験があると回答した。全体の約 85%に海外渡航経験があるということが分かる。

表 12 海外渡航経験の回数

①	②	③	④	合計
8	5	2	6	21
① 1～3 回 ② 4～6 回 ③ 7～9 回 ④ 10 回以上				

次に海外渡航経験があると回答した教員を対象に、その回数について尋ねた。最少が 1 回、最多が 22 回と回答し、全回答者の平均は 6.6 回となった。

海外渡航経験があると回答した教員を対象に、海外渡航の目的と行先、期間について尋ねた（複数回ある場合は 3 回までの記入を求めた）。目的としては、全体の 76%が旅行と回答した。次いで、留学、仕事 という結果となった（観光と遊び、遊行、演奏旅行、卒業旅行、家族旅行、新婚旅行という回答は旅行、夫に同行＋補習校講師と転勤という回答は仕事、短期語学学校と短期語学留学、ちょっとしたプチ留学、短期留学という回答は留学に統一した）。その他の回答は「親戚の結婚式」という回答であった。行先としては、アメリカが 20 と回答数としては最多であり、次いでオーストラリアが 5、香港とイタリア、イギリスが各 3、マレーシアとフランス、中国、台湾、スペインが各 2、モンゴルとモロッコ、バレー、ニュージーランド、タイ、コートジボワール、グアム、韓国、カナダ、インドネシア、インドが各 1 という結果となった（ハワイとサイパ

ンはアメリカ、バリ島はインドネシア、プリンスエドワード島はカナダ、ケアンズはオーストラリアとした 外務省ホームページ参照)。期間としては、1 週間程度が 30、半月程度が 13、1 カ月程度が 4、半年程度が 1、1 年以上が 4 という結果となった。最短が 3 日間（目的は旅行、行先は韓国）、最長が 5 年間（目的は仕事、行先はアメリカ）となった。

6.2.2.4. 英語民間試験の受験経験とその詳細

実用英語技能検定や TOEIC などの英語民間試験の受験経験有無と、受けたことがある場合には試験名と合格級や点数を尋ねたところ、25 名中 15 名が受験経験があると回答した。全体の 6 割が英語民間試験の受験経験があるということになる。

受験経験があると回答した 15 名のうち、13 名が実用英語技能検定を経験している。その取得級は 2 級が 6 名と最も多く、準 2 級が 2 名、3 級と 4 級が各 1 名であった。13 名のうち、半数近くが 2 級を取得している。この 2 級というのは、レベルでいうと「高等学校卒業程度」にあたる（公益財団法人日本英語検定協会ホームページ参照）。その他の回答としては、「準 2 か 3 級」、「忘れた」、「2 級のペーパーのみ、雪で 2 回とも面接試験を受けられなかった」というものであった。また、15 名のうち、1 名は TOEIC 500 点と回答し、1 名は無回答であった。

6.2.2.5. 英語（活動）の授業に関して

以前は担当していたと回答した教員が 10 名と最も多く、次に担当したことがない教員が 8 名、現在担当している教員が 7 名であった。25 名中 7 名が現在担当していると回答した。この 7 名を対象に以下の 2 つの質問をした。

授業をすることに関する負担度合いを尋ねる問いだが、時々感じる・たまに感じる教員が各 2 名、常を感じる・あまり感じない教員が各 1 名であった、①常を感じる と ②時々感じる、③たまに感じる の回答に 6 名中 5 名が該当した。1 名は無回答だった。

表 16 【2. (1) で①と回答した教員を対象】英語を教えることは好きか

①	②	③	④	⑤	合計
0	2	2	1	0	5

①とても好き ②まあまあ好き ③どちらでもない ④あまり好きではない
⑤全く好きでない

また、英語を教えることが好きかを尋ねる問いには、②まあまあ好き と ③どちらでもない といった2つの項目が同数であったが、④あまり好きでない という回答を1名している。2名は無回答だった。

6.2.2.6. 英語自体は好きか

表 17 英語は好きか

①	②	③	④	⑤	合計
1	10	6	3	2	22

①とても好き ②まあまあ好き ③どちらでもない
④あまり好きではない ⑤全く好きでない

教員が英語を好きかについては、②まあまあ好き という回答が最も多かったが、①とても好き と ②まあまあ好き の2つの項目の回答者数と、③どちらでもない と ④あまり好きでない、⑤全く好きでない の3つの項目の回答者数が同数であることが分かる。3名は無回答だった。

6.2.2.7. 英語（活動）の授業への不安

表 18 英語（活動）の授業に関する不安（複数回答可）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
20	4	13	12	0	2	2	4	3	0

①自分の英語力 ②年間指導計画や授業指導案の作成 ③授業の進め方
④教材の開発や準備の時間 ⑤英語に関する教員研修 ⑥中学校との連携
⑦教員同士の協力体制 ⑧児童からの反応 ⑨保護者からの反応 ⑩その他

最も回答数が多かった項目は、①自分の英語力 であった。次いで、③授業の進め方 と ④教材開発や準備の時間 という順で回答数が多かった。

6.2.2.8. 研修における希望内容

表 19 英語（活動）に関する研修において受講を希望する内容（複数回答可）

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
2	16	6	14	14	3	3	1

①授業の目的・意義 ②授業に必要な英会話やクラスルーム・イングリッシュ ③発音・リズム ④ALT と打ち合わせができる程度の英語力 ⑤すぐに使える教材や実践例 ⑥年間指導計画や授業指導案の作成 ⑦ほかの学校の授業の様子 ⑧その他

研修を受講する場合に、希望する内容を尋ねたところ、②授業に必要な英会話やクラスルーム・イングリッシュ の項目の回答が最も多かった。次いで、④ ALT と打ち合わせができる程度の英語力 と ⑤すぐに使える教材や実践例 という回答が同数で多かった。その他の回答は、「教材研究に費やしていく時間がないので、ズバリ、教材やカード、ポスターをプリントアウトしたり用意したりする研修がしたいです（40 代女性、4 学年担当）」というものであった。

6.2.2.9. 小学校での英語教育に対する感想

小学校の英語教育への考えに対する自由記述の項目を設けた。以下がその結果となる。

- これでよいのか。（50 代男性、管理職）
- 英語力も大事だが、それ以前に人とのコミュニケーション能力を上げることが必要であるとする。（20 代男性、5 学年担当）
- これからの国際社会に出ていく子どもたちに英語は必要だと思います。ただ、どこまで教えていくのか、学生の時の知識しかない自分がどのように教えてあげられるのか、その教材研究に割く時間を今以上に作れるのか、とても不安です。（30 代女性、1 学年担当）
- 授業内でなくても良いのですが、絵本レベルから、辞書なしで読んで意味を想像して取っていくことが長文理解するのに有効でした。（50 代女性、養護教諭）
- 専科としてやってほしい。興味はあっても、担任を持ちながら教材研究や準備をするのはとても難しい。（30 代女性、5 学年担当）

7. 考察

本節においては、児童に関わる研究課題に対し、授業見学とアンケート結果を踏まえ

たうえて、児童全体の回答からと、大きく差が見られた回答へは学年や性別での比較から考察していく。教員に関わる研究課題に対しては、授業を担当している教員や英語が好きと答えた教員の回答や自由記述も踏まえて詳しく考察していく。

7.1. 研究課題 1

7.1.1. 児童の回答全体から

研究課題 1 は、「小学校児童は英語と学校内外においてどのように関わっているのか」である。まずは実際に授業見学をした気付きから、考察を述べる。児童は、ほとんど板書がなく、歌やダンスなどを主とする授業を全体的に楽しんでいる。残りの 10 分ほどでしか問題演習時間はなく、英語を発音したり聞いたりして授業に臨んでいる。英語を学ぶ時間というより、以前から行われている英語活動のような取り組みがなされているため、英語を楽しんでいる様子が見られた。特に自分や担任の好きなものやことを英語で表現する時間においては、自分にとって身近な内容であるためか、より楽しんでいる様子が見られた。English Day Camp は夏季休業中の活動であったにも関わらず、10 名を超える参加者がいたことから、英語に対して積極的な姿勢が見られる。また、授業の内容は毎回同じ活動をくりかえしていることから、児童が英語を身近に感じ、英語に慣れ親しんでいっていることが分かる。見学の対象が 5 学年であったため、このような授業内容を今年度と同様に来年度も継続していくことによって、より英語が身に付くことも考えられる。同時に、同じことをくりかえすことに対し、児童側が飽きを感じてしまうことも考えられる（アンケート調査においても、つまらない理由に対し、「ずっと同じことをやるから」や「いつも似た授業だから」という回答があった）。教員側が児童に対し、くりかえし同じ活動を行う理由を明確に示しつつ、適度に新鮮味のある活動を盛り込んでいく必要がある。例としては、English Day Camp のような普段の授業とは違う英語とのふれあいの機会を今後も設け、より多くの児童の参加を求めていくことが挙げられる。

次にアンケートの結果から考察をしていく。

まずは学校内での英語との関わりについてだが、(1) 英語の授業は楽しいか という質問に対し、①とても楽しいと ②楽しい、③まあまあ楽しいの「楽しい」が含まれる積極的回答と ④ふつうと ⑤あまり楽しくない、⑥ぜんぜん楽しくないの消極的回答といった、2 つに分けた。

程度を問わずして、7 割近くが英語の授業に対し楽しさを感じていることが分かった。

英語の授業に関しては、楽しいという積極的な気持ちを抱いている児童が多いため、現在の内容を継続していくべきであることが分かる。(2) の回答結果からは、全体では、歌を歌うことやリズムなどの練習といった、英語に慣れ親しむ活動に楽しさを感じている割合が多いことが分かる。(3) は、③もっと英語を使えるようになりたいから という回答が最多であった。児童は、英語を授業で習う＝英語を運用できるようになる、という考えを持っていることが考えられる。(4) の回答からは、授業の活動内容の難易度に関して、全体的には問題がないようではあるが、児童の興味を引くような活動内容を考えていく必要があることが分かる。

次に、学校外での英語との関わりについて触れていく。株式会社栄光（2019）の調査においては、小学生の 32.1% が学校の授業外での英語に関する学習や習い事をしているという結果が出ている。A 小学校は、36% が学校外学習を行っており、そのうち半数以上が ①塾や英会話教室、家庭教師 など学習をしていると回答した。この 36% がどのように英語の授業との関わりを持っているかを表 20 に表した。

表 20 つまらないとおもった理由（学校外学習者）

①	②	③	④
2	8	2	3

①難しいから ②簡単すぎるから ③興味がないから ④その他

全体の割合と比較すると、少し ①とても楽しい と ②楽しい、③まあまあ楽しい の回答者数の割合が少なくなっている。そこで、その中でも、④普通 と ⑤あまり楽しくない、⑥全然楽しくない と回答した児童がどうしてつまらないと思ったかを表 20 にしたところ、②簡単すぎるから と回答した人数が多いことが分かる。また、学校外学習をしている、という点から興味がなかったり難しかったりしてつまらないと感じる割合は少ないということが分かる。学校外学習をしていない児童もいるため、授業の難易度を簡単すぎると感じている児童に合わせることは、難しい。しかし、児童みながやりがいを感じることができる活動内容を考えることはできるのではないだろうか。タブレット端末など、容易に学校外学習ができるようになりつつある環境の中、この先も活動内容を考えていくことが求められる。

7.1.2. 学年比較

吉田他（2004）は、札幌市内の小学校へ通う 4 学年～6 学年の児童 850 名を対象に、

学習方略と原因帰属及び学習意欲の調査を行ったところ、学習に対し最も内発的価値を感じているのは、4 学年、次いで 5 学年、5 学年と僅差で 6 学年という結果になった。また、3.2. において述べた Carreira (2011) の先行研究でも、学年が上がることで、英語学習への動機付けと学習全般への動機付けのどちらも低下するという結果が出ている。本研究の児童のアンケート調査 (1) の回答からも、より楽しさを感じている割合が多いのは 5 学年であることが分かる。また (4) の回答結果からも、英語の授業に対し、つまらなさを感じている回答をしたのは 6 学年が多く、かつその理由は興味がないため、という回答の割合が多かったことを受け、6 学年にはより興味を持たせる活動が求められる。

7.1.3. 性別比較

7.1.2 での吉田他 (2004) の研究においては、学年だけでなく性別での比較も行っており、無気力感を感じていると回答した割合は、男子の方が多かったとしている。本研究の児童のアンケート調査 (1) の授業の楽しさを感じる質問に関しては、②楽しい という項目の回答数に次いで 2 番目に多いのが、男子は同数で ①とても楽しい と ④普通である一方、女子は ④普通 であることから、より楽しさを感じているのは男子であることが分かる。吉田他 (2004) の調査のように無気力感について触れているわけではないが、本研究では授業に対しより楽しさを感じているのは男子であるため、結果に差が生まれていることが分かる。(2) の楽しかった活動内容を問う質問においては、男女どちらも ①歌を歌うこと の回答が最多であった。男子は ①歌を歌うこと が最多の 22、次いで ②発音やリズムの練習をすること が 16 といった回答数であったが、女子の回答数は ①歌を歌うこと が 12、②発音やリズムの練習をすること と ③歌に合わせたダンスをすること がそれぞれ 11 と 3 つの回答の差が 1 とほとんどなく、女子は男子に比べてダンスをすることを楽しさを感じていることが分かる。

7.2. 研究課題 2

7.2.1. 児童の回答全体から

研究課題 2 は「小学校児童はどのような英語の授業を望んでいるのか」である。(5) においては、授業を楽しくするためにしたいことについて尋ねた結果、同数で、②もっと発音やリズムの練習をしたい と ⑧英語で何かを書きたい が最多の回答数であった。読む・聞く・話す・書く の 4 つの技能や、読む・聞く・話す〔やりとり〕・話す〔発表〕・

書くの5つの領域において、児童は、話す・書くといった自分で英語を使い表現をすることの技能の習得を求めていることが分かる。児童に英語を楽しませるといった教員側のねらいと、英語を使えるようになりたいという児童の望みが少し食い違っていることが考えられる。また、その他の選択肢を設け、そこでより具体的な授業を楽しむためにしたいことを記述した児童もいた。自由記述は形態に対する要望と授業内容に対する要望の2つに分けられた(表21)。

表21 授業を楽しむためにしたいこと

種類	自由記述内容(回答者の学年と性別)
形態	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなが恥ずかしくないような授業を受けたい(5学年女子1名) ・隣の人とだけでなくもっと他の人とも活動をしたい(6学年女子1名)
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと難しい問題を出してほしい(5学年男子2名) ・三単現など活用できることを詳しくやりたい(6学年男子1名) ・ゲームをしたい(5学年男子、5学年女子、6学年女子各1名) ・詩を作りたい(5学年女子1名) ・文を書きたい(6学年女子1名) ・英語で食べ物の名前を言いたい(6学年男子1名) ・単語を教えてほしい(6学年男子1名) ・簡単な本を読みたい(6学年男子1名)

隣の席でのペア活動以外の活動形態についての記述に関しては、小学校での英語のみならず、主体的に対話的な深い学びと表現される学習指導要領でのことばに則り、中学校や高等学校、他教科においても求められる学びとなる。授業での活動に積極的に取り入れていきたいものである。授業内容に関しては、より難易度を上げた問題演習を求める記述が見られた。7.1.の考察においても簡単すぎる授業内容を理由に授業を楽しくないと回答した児童について触れた。場合によっては習熟度別の授業が行われることにもなり得る。より英語を得意とする層への対応に関しては、今後も課題となり続けるであろう。その他にも、ゲームやライティング活動、スピーキング活動、リーディング活動に関して具体的な記述があった。「英語で食べ物の名前を言う」活動に関しては、身近なものを英語で発話したいという意識が見られる。これは、取り入れやすい活動であると考えられる。

また、(6)においては、③英語で外国の人と話せるようになりたいと回答した者が最も多かった。ここからは、英語を話せるようになりたいという考えを持っている児童

がより多いことが分かる。英語を習う＝英語を話す といったイメージが強いことが考えられる。次いで ⑥外国に行ってみたい の項目の回答者数が多かった。英語を習うことで、外国へ赴くというイメージにつながることも考えられる。また、ここでもその他の選択肢を設けた。

自由記述は近い未来にできるようになりたいことと遠い未来にできるようになりたいことの2つに分けられた(表22)。

表 22 英語を使ってできるようになりたいこと

種類	自由記述内容(回答者の学年と性別)
近い未来	<ul style="list-style-type: none"> ・服や店の看板に書いてある英語を読めるようになりたい(5 学年男子 1 名) ・英語の歌を聴いて何と言っているか知りたい(5 学年男子 1 名) ・弟に英語を教えてあげたい(5 学年女子 1 名) ・外国の人と話したい(6 学年男子 1 名)
遠い未来	<ul style="list-style-type: none"> ・将来のために覚えたい(5 学年男子 1 名) ・外国に住みたい(5 学年男子 1 名) ・サッカー選手になっていろいろな国に行きたい(5 学年男子 1 名) ・英語の歌を作りたい(5 学年女子 1 名) ・留学したい(6 学年男子 1 名) ・英語でゲームを作りたい(6 学年男子 1 名)

近い未来の記述から考察する。(5)の自由記述でもあったが、身近な服や店、英語の歌などの英語の意味を知りたいというものが見られた。外国人と英語を用いて話すことへの憧れがあるような記述があった。自分が英語を覚えることを通して、さらに自身の弟に教えるという行為につなげる回答もあった。遠い未来の記述に関しては、具体的に将来の夢があり、かつそれが英語と関わりがある児童が多く見られた。道具的手段として英語をとらえているということになる。留学や居住など、目的は異なっているが海外へ行くことを考えている児童もいることが分かる。

7.2.2. 学年比較

(5)において、5 学年は ⑤英語で会話をする こと と ②リズムや発音の練習をすること、⑧英語で何かを書きたい へ回答が集中した。一方 6 学年は、②リズムや発音の練習をすること と ⑧英語で何かを書きたい、①歌を歌うこと へ回答が集中した。ここからは、5 学年は英語で会話をする こと、6 学年は歌を歌う ことに関わる活動をすることで、

より授業を楽しく感じる事が分かった。

7.2.3. 性別比較

白井（2016）は札幌市内の小学校2校の5学年、6学年437名の児童を対象に読書関連動機の読書行動・国語学習スキルに対する影響を性別に焦点を当て調査した。そこでは、作文や文章を書くことという項目において、大幅に女子の自己評価が高いという結果が出た。本研究のアンケート調査（5）においては、男子が②発音やリズムの練習をすること、女子が⑧英語で何かを書きたいの回答が多く、差が見られた。男子の回答数最多項目と2番目に多い項目、また女子の回答数最多項目と2番目に多い項目を比べると、どちらも10の差があることから、それぞれが楽しいと感じる活動に特徴がみられることが分かった。

（6）の回答結果においても女子の何かを書くという活動を好んでいる様子がうかがえる。最多の回答は男女ともに③英語で外国の人と話せるようになりたいであった。しかし、回答数に大きく差がある項目として、⑤英語で手紙や長い文章を書けるようになりたいが、男子は男子全体の人数の22%、女子は女子全体の人数の50%の回答率となる。ここからも、男女で大きく差がうまれていることが分かる。白井（2016）の研究は国語の自己評価に関しての結果であり、本研究とは教科も観点も異なっているが、性別で比べると、女子がよりライティング活動を好んでいるということが考えられる。

7.3. 研究課題3

7.3.1. 現在授業を担当している教員7名

研究課題3は「小学校教員は英語の授業に関してどのように考えているのか」である。現在英語の授業を担当していると回答した教員を対象に、英語の授業を負担に感じるかと英語を教えることは好きかを尋ねた（表23）。

表 23 現在授業を担当する教員の回答の詳細

	回答者の詳細	英語の授業をすることに対する負担	英語を教えることは好きか
1	・20代男性、担当学年は5学年 ・海外渡航経験なし ・実用英語技能検定準2級取得	無回答	無回答
2	・30代男性、担当学年は3学年 ・海外渡航経験あり（5回、旅行でアメリカやタイ、オーストラリアなど） ・実用英語技能検定3級取得	たまに感じる	あまり好きでない
3	・30代男性、担当学年は5学年 ・中高英語科の免許取得 ・海外渡航経験あり（1回、留学でニュージーランド） ・実用英語技能検定4級取得	たまに感じる	まあまあ好きである
4	・30代男性、担当学年は6学年 ・中高保健体育科の免許取得 ・海外渡航経験なし ・英語民間試験は受けていない	常を感じる	まあまあ好きである
5	・30代女性、担当学年は1学年 ・幼稚園教諭の免許取得 ・海外渡航経験あり（2回、旅行で韓国と香港） ・実用英語技能検定は合格したが合格級を忘れた	時々感じる	どちらでもない
6	・30代女性、担当学年は4学年 ・幼稚園教諭の免許取得 ・海外渡航経験あり（5回、観光でアメリカ、留学でアメリカやカナダ、など） ・TOEIC500点取得	あまり感じない	まあまあ好きである
7	・40代女性、担当学年は6学年 ・中高の保健体育科の免許取得 ・海外渡航経験あり（2回、留学でアメリカ） ・英語民間試験は受けていない	時々感じる	どちらでもない

まず、負担に関する質問だが、①常を感じる と ②時々感じる、③たまに感じる という3つの回答を6名中5名がした。頻度は問わずして、教員は負担に感じていることが分かる。「常に感じている」と答えた教員に関しては、海外渡航経験や英語民間試験の受験経験がない。「あまり感じない」と答えた教員に関しては、留学による海外渡航経験があり TOEIC500点を持っていることが分かるが、他の回答者にも留学経験があり負担を感じている教員がいることから、海外渡航経験と負担に関する回答の関連性はあ

まりないということができる。

次に、「英語を教えることは好きか」という質問に対しては、①とても好きである という回答者はおらず、②まあまあ好きである という回答者が3名、③どちらでもない という回答者が2名、④あまり好きでない という回答者が1名という結果であった。英語を教えることに対し、「とても好き」や「全く好きでない」という教員はおらず、「どちらかと言うと好き」という割合が高いようだ。②まあまあ好きである と回答した教員の詳細を見ると、留学経験者が2名おり、7名のうちの留学経験者3名の中の2名にあたる。留学経験は少なからず英語を教えることに影響していることが考えられる。

7.3.2. 教員は英語自体を好んでいるのか

回答者22名（男性8名、女性14名）の全体を見ると、①とても好き が1名、②まあまあ好き が10名と、半分が英語を好んでいることが分かる。しかし、③どちらでもない が6名、④あまり好きでない が3名、⑤全く好きでない が2名と英語を好んでいない教員がいることも分かる。英語がとても好き、まあまあ好きと回答した教員を詳しく分析すると、以下のようになった（表24）。

表 24 英語が①とても好き②まあまあ好きと回答した教員 11 名の男女人数、年代人数、中高英語科免許取得者非取得者人数、海外渡航経験有無人数、英語民間試験受験経験有無人数

男	女	20 代	30 代	40 代	50 代	中高英語科免許保持者	非保持者
4	7	4	4	2	1	2	9
海外渡航経験あり		なし		英語民間試験の受験経験あり		なし	
9		2		9		2	

まずは、性別比較についてだが、男性は全体の男性の人数に対し36%、女性は全体の女性の人数に対し50%が英語を好んでいることが分かる。ここからは、英語を好んでいるのは女性の方が割合が高いということができる。

年齢で比較をすると、20代は全体の20代の人数に対し80%、30代は全体の30代の人数に対し36%、40代は全体の40代の人数に対し40%、50代は全体の50代の人数に対し25%が英語を好んでいることが分かる。ここからは、20代が最も英語を好んでいるといえる。30代、40代は40%前後、50代に関しては25%の割合となっていることから、年代が上がることで英語を好む割合が減っていつていることが分かる。

中高英語科の免許を持っているのは25名のうち3名であるが、この3名の中の2名が英語を好んでいる。③どちらでもない と回答した残り1名の教員に関しては、国語科と英語科の免許取得者であった。中高英語科の免許取得者はおおむね英語を好んでいることが分かる。

海外渡航経験があるのは25名の中の21名であったが、9名(42%)が英語を好んでいる。一方、渡航経験がないのは25名の中の4名であったが2名(50%)が英語を好んでいる。海外渡航は76%が旅行目的のため、必ずしも英語が好きかどうかと海外渡航経験が関係するとはいえないようだ。

英語民間試験の受験経験がある15名に対し9名(60%)が英語を好んでいた。英語民間試験に関しても、高等学校や大学受験にあたって取る者も多く、必ずしも英語が好きかどうかに関係しているとはいえないことができない。

7.3.3. 教員が英語の授業に関して抱える不安

3.3.における猪井(2009)の研究において行われた小学校教員41名を対象にした英語の授業に関するアンケート調査においては、自身の英語力に不安を抱く教員が最も多いという結果が出た。本研究のアンケート調査2.(5)でも、英語の授業に関してどのようなことに不安を抱えているかについて尋ねている。最も多かったのは自身の英語力に関することであった。この結果は2.(6)の受講を希望する研修内容の結果にもつながっている。国語や算数だけでなく、体育や音楽などの実技といった幅広い教えをしていかなければならない小学校教員にとって、新たに英語を教えていくということが大きな不安と化していることが分かる。

7.3.4. 自由記述より

アンケートにおいて、小学校での英語教育に対しての考えを記入する質問を設けたところ、不安と要求、疑念の3つに分けられる意見が見られた(表25)。

表 25 教員の自由記述詳細

種類	具体的記述（年代と性別、担当学年）
不安	・ これからの国際社会に出ていく子どもたちに英語は必要だと思いますが、どこまで教えていくのか、学生の時の知識しかない自分がどのように教えてあげられるのか、その教材研究に割く時間を今以上に作れるのか、とても不安です（30代女性、1学年担当）
要求	・ 英語力も大事だが、それ以前に人とのコミュニケーション能力を上げることが必要であると考え（20代男性、5学年担当） ・ 授業内でなくても良いのですが、絵本レベルから、辞書なしで読んで意味を想像して取っていくことが長文理解するのに有効でした（50代女性、養護教諭） ・ 専科としてやってほしい、興味はあっても、担任を持ちながら教材研究や準備をするのはとても難しい（30代女性、5学年担当）
疑念	・ これでよいのか（50代男性、管理職）

名畑目（2014）は、小学校教員を志望する日本人大学生 40 名を対象にアンケート調査を行い、英語活動をどのように感じているか、英語活動の実践にどのような能力や資質が必要と感じているか、教員として英語活動を実践するために大学でどのようなことを学びたいと感じているかについて調査した。そこでは、小学校教員志望者は英語活動の必要性を高く評価しつつも、英語活動に対する不安は強いという結果が出た。本研究のアンケート調査の不安に関する自由記述においても、英語教育に関して理解はしているものの、自分がこの先どのように指導をしていくかについて、および、教材研究について不安を感じている旨が書かれている。また、要求に関する自由記述は、人とのコミュニケーション能力の指導や授業内容、専科教員の要求などが書かれている。そして、「これでよいのか」というストレートな疑念が示された。

英語教育に対して賛成や反対の記述はなかったものの、自分が授業するにあたって様々な意見があることが分かる。萬谷（2019）は、全国の小学校教員 335 名を対象に、小学校英語における担任教員と専科教員についての意識調査を行ったところ、専科教員による指導を望んでいる割合が多かったとしている。本研究のアンケート調査においても、専科教員を求める記述があった。教材研究などの準備時間の不足に関する記述や専科教員の要求が見られたことから、日々激務に追われる教員が、さらに教科が増えて授業の準備をする時間を確保するということが容易ではないということが分かる。人とのコミュニケーションを重視している記述からは、グローバル化だけでなく情報化や核家族化にも注目していることがうかがえる。英語を使うことは、多くの場合が人とのコ

コミュニケーションを意味していることから、その基盤となる活動へ重点を置きたいという考えが読み取られる。また、自身の英語学習の経験からより効果的であった手段についての記述があり、このような具体的な経験や考えがある教員が増えることで、指導に工夫が加えられることが考えられる。2020 年度からの英語教育が果たしてどのような効果を生むかに関しては、実施してみないと分からないが、引き続き研究が進められていくことが求められる。

7.4. 研究課題 4

研究課題 4 は「小学校教員は今後の英語教育をどのように考えているのか」である。3.3.における猪井（2009）のアンケート調査においては、90%の小学校教員が英会話やクラスルーム・イングリッシュに関わる研修の受講を希望している。本研究のアンケート調査 2. (6) においても、英語の授業に関する研修の内容への希望を尋ねているが、②授業に必要な英会話やクラスルーム・イングリッシュ が最も回答数が多く、④ ALT と打ち合わせができる程度の英語力 と ⑤すぐに使える教材や実践例 が 2 番目に多かった。英語力に関しての回答が多いことから、7.3.3 における幅広い教科や科目を指導していく小学校教員が新たに英語を指導していくことへの不安を抱えているという考察につながる。また、⑤すぐに使える教材や実践例 は、教材に関わる項目となっている。ここからは、7.3.4 における自由記述の「要求」の中の 1 つに共通することが分かる。不安を少しでも減らすためにも、英語力に関わる研修が積極的に行われる必要があることが考えられる。

8. おわりに

本研究では、2020 年度より英語活動や英語が必修化されることを受け、東京都 23 区内の公立小学校 1 校を対象に、英語教育の現状と今後の英語教育の在り方を考察した。このケース・スタディを通して考察された事項は以下の通りである。

まずは、授業見学を通して、授業の内容はほとんど板書がなく、歌やダンスで英語を楽しむものであり、それを児童は全体的に楽しんでいたように見られた。また、English Day Camp においては、夏季休業中にも関わらず 12 名の参加があり、有志の東京女子大学の学生が行った活動に児童は積極的な姿勢で臨んでいたことから、このような催し物を今後も継続して設けていくべきであることが分かる。本研究は授業見学の回数が少なかった点や、A 小学校の 5 学年 B 組に限った見学となった点、担任や補助教員への詳

しいインタビューをすることができなかった点などが反省点として挙げられる。

児童を対象とした英語の授業に関わるアンケート調査を通して、約7割の児童が英語の授業を楽しんでおり、最も楽しまれている活動が、授業において主として行われている「歌を歌うこと」であることが分かった。一方で、つまらなさを感じている児童も4割弱おり、その理由としては興味が無いからという回答が挙げられた。自由記述からは、歌やダンスといった活動に恥ずかしさを感じ、また、授業形態が隣同士だけでなくグループ活動等幅が広がるよう希望する児童がいることも分かった。学校外で英語と関わる児童も3割以上いた。学校外学習者の学習方法としては半数以上が英会話教室や家庭教師であったが、学校外で英語を学んでいることが要因となり、難易度が低いという理由で学校における英語の授業につまらなさを感じている児童もいた。そして、多くの児童が英語を使って外国人と話すことができるようになりたいという希望を持っていることが分かった。学年や性別で比較したところ、より大きく差が出た結果としては、5学年と男子の方がより英語の授業に楽しさを感じていることや、先行研究にもあったように女子が何かを書くという活動を好んでいることなどが分かった。本研究の児童を対象としたアンケート調査は、より楽しさに焦点を当てることを軸として作成されたため、4割のつまらなさを感じている児童へ掘り下げた質問をすることができなかった。また、「英語の授業」というタイトルで絵を描かせる質問では予想を超えた興味深いイラストが多くあったにも関わらず、回答と結び合わせて詳しく分析できなかった。先行研究においても、児童へのアンケート調査を元とした論文の数は多くなく、本研究同様の調査が積極的に進められていくことを期待する。

教員を対象とした英語の授業に関わるアンケート調査を通して、現在英語の授業を担当している教員を対象とした考察としては、頻度は問わずして教員は負担に感じていることや、留学経験がある教員は英語を教えることを好んでいることなどが分かった。また、教員全体としては、半数が英語自体を好んでいた。英語の授業に関わる不安としては、自身の英語力と回答した教員がほとんどで、同時に授業に必要な英会話やクラスルーム・イングリッシュを内容とした研修の受講を希望していることが分かった。自由記述からは教材研修に時間を割けないことから、専科教員が授業を行うことを望んでいる教員が多いことが分かった。先行研究では、小学校教員を希望する大学生を対象に、実際に教壇に立った際に英語を教えることに対する考えを調査するものも存在し、さらにそこに不安を感じている割合が大きいという結果も出ている。本研究のように現職の小学校教員を対象としたアンケート調査はもちろんのことだが、小学校教員を志す大学

生を対象とした調査が行われ、結果を大学での授業などへ活かしていくことで、小学校英語教育の活性化につながるだろう。また、専科教員の在り方も見直していくことで、日々激務に追われる小学校教員の働き方改革へつなぐと考える。

ケース・スタディとして1校に焦点を当てて研究を行ったが、先行研究と比較しながら小学校教育に共通する課題として、児童と教員のどちらに対しても英語教育との関わりにおけるサポートが要されることが挙げられる。特にA小学校のような東京都から英語教育の特別な指定をされていない一般的な公立の小学校を対象として、全国的に英語活動や英語が必修化される2020年度以降、より顕著に求められる。

本研究を通して、筆者が小学生の時には体験し得なかった、毎週行われる英語の授業に実地的に触れたり、児童や教員の現実的な意見をうかがったりすることができた。来春からの中学校での教員生活においては、小学校や高等学校との連携を積極的に図り、生徒が英語を楽しく学ぶことができる環境を作っていきたい。なお、この研究の結果はA小学校の校長先生にお渡しする予定である。

謝辞

卒業論文執筆のための機会をくださった校長先生をはじめとする調査実施にご協力頂いたA小学校の児童と教職員の皆様、そして論文作成を支えてくださった皆様に感謝の意を申し上げます。

参考文献

【日本語文献】

- 池田真生子（2009）「ALTとのティーム・ティーチングを支えるもの：小学校英語におけるケース・スタディ」、『小学校英語教育学会紀要』、9巻、pp.47-54
- 猪井新一（2009）「英語活動に関する小学校教員の意識調査」、『茨城大学教育実践研究』、28巻、pp.49-63
- 臼井博（2016）「小学校児童の読書関連動機・読書行動・国語学習スキルに対する影響 一性差の分析を中心に」、『札幌学院大学人文学会紀要』、第100号、pp.113-129
- 及川賢（2017）「小学校英語指導に関する教員の不安度：教員経験年数、英語指導年数、中学校英語教員免許の有無による違い」、『埼玉大学紀要・教育学部』、66巻2号、pp.499-512
- 株式会社栄光（2019）「小学生の英語教育に関する意識調査」
http://www.eikohseminar.com/information/blogimages/2019005794_01.pdf（2019年12月7日閲覧）
- 木原竜平（2018）「小学校の英語教育に潜む3つの深刻な『わな』」、『（東洋経済オンライン）』

- <https://toyokeizai.net/articles/amp/240466?page=4> (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- 国土交通省観光庁 (2019) 「訪日外国人の消費動向」.
- <https://www.mlit.go.jp/common/001285944.pdf> (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- JACET SLA 研究会 (2013) 『第二言語習得と英語科教育法』、開拓社.
- JACET 教育問題研究会 (2017) 『新しい時代の英語科教育の基礎と実践—成長する英語教師を目指して—』、三修社
- 東京都教育委員会 (2018a) 「東京都グローバル人材育成計画 '20 (Tokyo Global STAGE '20)」
http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/02/09/documents/05_02.pdf (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- 東京都教育委員会 (2018b) 「都独自英語教材『Welcome to Tokyo』を作成」
<http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/03/08/11.html> (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- 鳥飼玖美子 (2018) 「小学校の英語教育はどうなるのか (視点・論点)」、『NHK解説委員会解説アーカイブス』 <https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/308968.html> (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- 名畑目真吾 (2014) 「小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査」、『小学校英語教育学会誌』、14 巻 1 号 pp.131-146
- 日本政府観光局 (JNTO) (2018) 「2017 年国・地域別／目的別訪日外客数 (暫定値)」
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/2017_december_zantei.pdf (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- 日本政府観光局 (JNTO) (2019a) 「2018 年国・地域別／目的別訪日外客数 (暫定値)」
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/2018_december_zantei.pdf (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- 日本政府観光局 (JNTO) (2019b) 「世界各国・地域への外国人訪問者数ランキング」
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_statistics.html (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- パトラー後藤裕子・竹内麻子 (2006) 「小学校の英語活動における評価：児童英検 (BRONZE) を使った試み」、『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』、第 25 号、pp.1-5
- 早瀬沙織 (2015) 「日本の小学校英語教育の課題—韓国的事例研究を踏まえて—」、『英語へのまなざし 斎藤英学塾 10 周年記念論集』、pp.69-90、ひつじ書房
- 樋口忠彦・國方太司・大村吉弘・田邊義隆・衣笠知子・泉恵美子・箱崎雄子・加賀田哲也・植松茂男 (2008) 「中学入学以前の英語学習経験が大学生の情意要因に及ぼす影響」、『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』、第 27 号、pp.25-51
- ベネッセ教育総合研究所 (2006) 「小学校英語のこれまでの流れ」
https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2006/pdf/data_17.pdf (2019 年 12 月 7 日閲覧)
- 北條礼子・松崎邦守 (2008) 「現職小学校教員の小学校英語活動 (支援、校種間連携、研修希望内容等) への意識に関する調査研究」、『小学校英語教育学会紀要』、8 巻、pp.97-104
- 松宮新吾 (2013) 「小学校外国語活動担当教員の授業指導不安にかかわる研究：授業指導不安モデルの探求と検証」、『研究論集』、97 巻、pp.321-338 関西外国語大学
- 松宮奈賀子 (2010) 「小学校外国語活動における児童の不安に関する実態調査」、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 学習開発関連領域』、第 59 号、pp.107-114
- 文部科学省 (2004) 「小学校英語活動実施状況調査 (平成 15 年度実績)」

- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1388411.htm (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2005) 「小学校英語活動実施状況調査 (平成17年3月) の結果概要 (平成16年度)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1395204.htm (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2006) 「小学校英語活動実施状況調査結果概要 (平成17年度)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/attach/1400980.htm (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2007) 「小学校英語活動実施状況調査結果概要 (平成18年度)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/029/siryo/attach/1401100.htm (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説外国語活動編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_012.pdf (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2009) 「グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/attach/1247196.htm (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2013a) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2013b) 「英語教育の在り方に関する有識者会議 議事要旨・議事録・配布資料」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/giji_list/index.htm (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2017a) 「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編」
- 文部科学省 (2017b) 「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語編」
- 文部科学省 (2018a) 「高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編」
- 文部科学省 (2018b) 「新学習指導要領に対応した小学校外国語新教材について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/houkoku/1382162.htm (2019年12月7日閲覧)
- 文部科学省 (2019) 「大臣メッセージ (英語民間試験について)」
http://www.mext.go.jp/a_menu/other/1422381.htm (2019年12月7日閲覧)
- 吉田典史・戸田弘二 (2004) 「小学生の学習方略と原因帰属及び学習意欲との関連」、『北海道教育大学紀要 教育科学編』、54巻2号、pp.15-31
- 萬谷隆一 (2019) 「小学校英語における担任教師・専科教師についての教師の意識調査」、『北海道教育大学紀要 教育科学編』、70巻1号、pp.165-174

【外国語文献】

Carreira, J.M. (2011) "Relationship between motivation for learning EFL and intrinsic motivation for learning in general among Japanese elementary school students". System, Vol.39, pp.90-102

【Web Site】

外務省ホームページ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/> (2019年12月7日閲覧)

外務省ホームページ「国・地域」 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html> (2019年12月7日閲覧)

公益財団法人日本英語検定協会ホームページ <https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/about/> (2019年12月7日閲覧)

国土交通省観光庁ホームページ <http://www.mlit.go.jp/common/001268669.xls> (2019年12月7日閲覧)

東京都ホームページ <http://www.metro.tokyo.jp/index.html> (2019年12月7日閲覧)

日本政府観光局ホームページ

https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/xls/190116_monthly.xlsx (2019年12月7日閲覧)

文部科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379940.htm (2019年12月7日閲覧)

添付資料 A：2019 年 4 月 23 日（火）の授業の流れ

時間	アクティビティ	詳細	児童の様子
11:35	4時間目開始、号令	日本語版「これから外国語の授業を始めます」と英語版"Let's practice English!" どちらもやっていた	英語版は、日直の児童が前に出て号令をした。
	歌 (How are you?)	How are you? という歌を電子機器から流れる音楽に合わせて歌う。以下、歌は電子機器から流れる音楽に合わせて歌っていた。	歌は全体的に恥ずかしがらずに歌っている様子だった。
11:40	歌 (曜日)	曜日の頭文字を身体で表現する歌。特にThursdayのthの発音を留意し、くりかえしていた。	舌を噛む補助教員の仕草を笑いつつも、しっかり真似していた。
	歌 (数)	数 (one, two, three...)の歌を歌う。	
	歌 (Five little monkeys)	電子機器からの音楽に加えて、映像も流していた。	この歌には振り付けもあった。映像が似たようなフレーズがくりかえされるといふこともあり、同じような場面で何度も笑っていた。
	歌 (ABCのうた)	アルファベットの歌を歌う。	
11:50	ビクチャーカードを見せてフレーズ確認	"I like apples."であれば、女の子とりんごが描かれているビクチャーカードを児童に見せて、そのフレーズをくりかえし確認した。	
	歌 (Let's dancinglish time !) (dance + English の造語で、英語的には間違えているがこのようなタイトルだった)	振り付けと共に、先のビクチャーカードで練習したフレーズを練習した。	
	映像を見てもう一度フレーズ確認	音楽と映像とともに、振り付けをして引き続きフレーズを練習した。	
12:00	歌 (ライオンじゃなくてLion)	発音チェックの歌。カタカナ読みではなく、実際に発音やアクセントに注意しながら英単語を練習した。	普段よりよく聞いているであろう「ライオン」や「チョコレート」といった単語に対し、実際に英語としての発音をくりかえしていた。
12:10	教科書の練習問題	リスニングをして3人の好きなものを聞き取る。その後は児童が挙手して、担任が指名し、全体で答え合わせまで行う。	教科書忘れの児童は隣に見せてもらってはいたが、ほぼ最後の方のアクティビティをしていなかった。隣の子も使うのでほんの少し見せてもらっている程度だった。
	教科書応用	担任の好きな色、食べ物、テレビ番組、スポーツを予想して日本語でメモする。その後補助教員に続き英語で担任に質問をする (What colors do you like?など)	この日1番の盛り上がりだった。
12:20	4時間目終了、号令	開始の号令同様、日本語版と英語版どちらも行った。	

添付資料 B：2019 年 5 月 14 日（火）の授業の流れ

時間	アクティビティ	詳細	児童の様子
11:35	4時間目開始、号令		
	歌 (How are you?)		
11:40	歌 (曜日)		
	歌 (数)		
	歌 (Five little monkeys)		
	歌 (ABC のうた)	ここまでの流れはライオンじゃなくて Lion を後にした以外は同様であった。みんな流れが分かっているようだが、相変わらず小さなことでもみんなで楽しんで笑っていた。	
11:50	ピクチャーカードを見せてフレーズ確認		
	歌 (Let's dancing time !)		
	映像を見てもう一度フレーズ確認		
12:00	教科書		
12:10	歌 (ライオンじゃなくて Lion)		
	教科書	来週は I like を使って自己紹介をみんなでするので自分の好きなものをメモしておくように、と補助教員が指示する。	好きな食べ物、TV 番組、スポーツ等を日本語でメモしていた。
12:20	4時間目終了、号令		

添付資料 C：2019 年 8 月 5 日（月）の English Day Camp の流れ

時間	アクティビティ	詳細	児童の様子
10:00	ウォーミングアップ	Head, Shoulders, Knees and Toes を歌ってウォーミングアップをした。	よく知っている歌のようで、気にする様子なく淡々と歌っていた。
	暑中お見舞いを作ろう	I want to ~ という表現を使って、夏休みにしたいことを誰かに宛てて暑中お見舞いを書く。児童は家族や担任の先生など様々な人に宛てて思い思いの暑中見舞いを作成していた。この際、児童 1 人に対し、学生が 1 人つくようにしていた。	この活動が全体を通して 1 番楽しそうにしていたように感じる。自分の夏休みの予定を英語や絵で表せることが嬉しかったり、楽しかったりするのかもしれない。
	ラリーゲームその 1	What's your name? や How tall are you? などの質問に対し、自分の名前や身長を英語で答える活動をした。身長はメジャーで測るといった算数の知識を活用するシーンも見られた。	身長の答え方 "I am ~ centimeters." "My height is ~ centimeters." に苦戦している児童が見られた。数字をいうのが難しかった。
	発音活動	絵と英語の会話文が書かれたカードを用いて学生の後に続いて読み合わせた。	座りながら読むのみの活動になってしまったため、少し退屈そうにしている児童も見られた。
	神経衰弱	絵とその英単語が書かれたカードを合わせた。カードは学生が作成したもので、3つのグループに分かれて行った。	ゲーム感覚でできるため、盛り上がりすぎたことにより、取った取らないの言い合いになってしまったグループもあった。家庭科を英語で表現できていた 6 学年女子がいた。
	ラリーゲームその 2	児童がトレジャーハンターとなり、それぞれのポイントを回った。英語で色や方向を児童が伝え合い迷路をたどったり、英語でドーンじゃんけんぽんをしたりしていた。最後にポイント毎で集めたカードを並べ替え、SUMMER という単語を完成させた。	グループで結束してラストを目指す姿が、ラリーゲームその 1 より顕著に見られた。男女や学年関係なく色や方向を伝え合ったり、じゃんけんをしたりする活動の良さを感じた。
12:30	閉会式	English Day Camp の終了を学生が告げた後に、児童の代表が英語で感謝の意を述べた。	

添付資料 D：児童を対象としたアンケート調査

英語の授業についてのアンケート（あてはまるものに○を付けて下さい）

学年：() 年生 性別： 男子() 女子()

(1) みなさんに質問です。英語の授業は楽しいですか。

- ①とても楽しい ②楽しい ③まあまあ楽しい
④ふつう ⑤あまり楽しくない ⑥ぜんぜん楽しくない

(2) (1) で①から③と答えた人に質問です。どんなことが1番楽しかったですか。

- ①歌を歌うこと ②発音やリズムを練習すること
③歌に合わせてダンスをすること ④英語を読んで問題をとくこと
⑤英語を聞いて問題を解くこと ⑥英語を書いて問題をとくこと
⑦英語を話して問題を解くこと ⑧その他()

(3) (1) で①から③と答えた人に質問です。どうして楽しかったのですか。

- ①簡単だから ②外国にきょうみがあるから
③もっと英語を使えるようになりたいから ④その他()

(4) (1) で④から⑥と答えた人に質問です。どうしてつまらないと思ったのですか。

- ①むずかしいから ②かんたんすぎるから
③きょうみがなから ④その他()

(5) みなさんに質問です。英語の授業をより楽しくするために、どんなことをしたいですか(したいことすべてに○を付けて下さい)。

- ①もっと歌を歌いたい ②もっと発音やリズムを練習したい
③もっと歌に合わせてダンスをしたい ④もっと問題をときたい
⑤もっと英語で会話をしたい ⑥英語で何かを聞きたい
⑦英語で何かを読みたい ⑧英語で何かを書きたい
⑨その他()

(6) みなさんに質問です。英語を使って何ができるようになりたいですか(できるようになりたいことすべてに○を付けて下さい)。

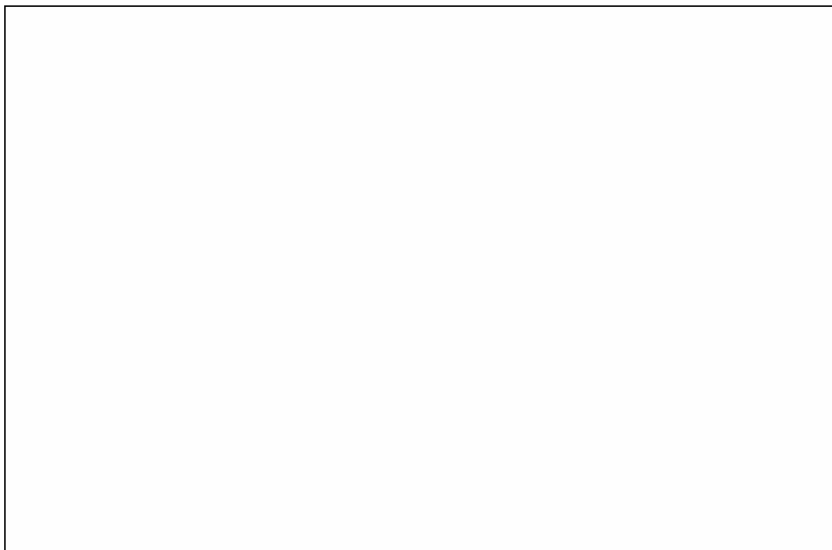
- ①英語の本や新聞を読めるようになりたい。
②英語の映画やドラマを見られるようになりたい
③英語で外国の人と話せるようになりたい
④英語の歌を歌えるようになりたい
⑤英語で手紙や長い文章を書けるようになりたい
⑥外国に行ってみたい
⑦その他()

(7) みなさんに質問です。学校の勉強以外で英語を勉強していますか。している場合はどのように勉強しているかを教えて下さい。

- ①している(どこで: だれに:)
②していない

(うらにつづく)

(8) 「 英語の授業 」 というタイトルで絵をかいて下さい。



☆アンケート はこれで終わり です、ご協力ありがとうございました！

添付資料 E：教員を対象としたアンケート調査

英語の授業に関するアンケート

(参照 <http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/bitstream/10109/1113/1/20090226.pdf>)

現在、「小学校の英語教育を考える」と題して、卒業論文を執筆しております。執筆に当たり、小学校の先生方が英語に関わる授業に対しどのような考えを持っていらっしゃるのか伺いたいと考えております。つきましてはお忙しい中誠に恐縮ですが、アンケートへのご協力のほどよろしくお願い申し上げます。なお、アンケート結果は研究以外の目的では使用されることは一切ありません。

東京女子大学現代教養学部人間科学科言語科学専攻 4 年 前田里紗
(k16c3098@cis.twcu.ac.jp)

1. ご自身について

- 1) 性別
①男性 ②女性
- 2) 年齢
①20代 ②30代 ③40代 ④50代 ⑤60代以上
- 3) 小学校教諭以外でお持ちの教員免許がある方はその種類をご記入下さい。
校種 () 教科 (科目) ()
- 4) 担当学年
①1年 ②2年 ③3年 ④4年 ⑤5年 ⑥6年 ⑦その他 ()
- 5) これまでに海外渡航をしたことはありますか。
①ある (回数: 回) ②ない
- 6) 5) で①あると答えた方は、目的と行先、期間、時期をご記入下さい。複数回ある場合は、3 回まで記入をお願いします。
・目的 () 行先 ()
期間 ()
・目的 () 行先 ()
期間 ()
・目的 () 行先 ()
期間 ()
- 7) これまでに実力英語技能検定や TOEIC などの民間のテストを受けたことがありますか。
①ある ②ない
- 8) 6) で①あると答えた方は、合格級または点数をご記入下さい (覚えている範囲で結構です)。
資格試験名 () 合格級または点数 ()

2. 英語の授業について

- 1) 現在、英語や英語活動の授業を担当していますか。
①現在担当している ②以前担当していたが、現在は担当していない
③担当したことがない ④その他 ()

- ご回答ありがとうございました。

Abstract

All elementary schools in Japan will officially start teaching English from April in 2020. Third and fourth grade pupils will participate in activities in English and fifth and sixth grade pupils will learn English as a subject. This research, therefore, aimed at investigating how English was currently taught at elementary schools.

In order to accomplish this aim, a case study was conducted at a regular elementary school located within the Tokyo metropolitan area. The researcher made several visits to this school, and administered a questionnaire to 177 pupils and 25 teachers there.

The results suggested that although many pupils enjoyed English lessons, especially ones with singing and dancing, 40 percent of the pupils thought English lessons were boring. The questionnaire for teachers revealed that they felt that teaching English was a burden, however, they were willing to take in-service training to become better English teachers.